

ことわざ 1	虻蜂とらず	ことわざ 5	遠くの親類より近くの他人
	雨垂れ石をうがつ		隣の花は赤い
	魚心あれば水心		虎の威を借る狐
	嘘も方便		泥棒をとらえて縄をなう
	うどの大木		なくて七癖
	鶉のまねをする鳥		情けは人のためならず
	鬼の目にも涙		怠け者の節句働き
	蛙の面に水		習うより慣れる
ことわざ 2	亀の甲より年の劫	ことわざ 6	二階から目薬
	枯れ木も山のにぎわい		憎まれっ子世にはばかる
	雉も鳴かずばうたれまい		二度あることは三度ある
	窮すれば通ず		二兎を追う者は一兎をも得ず
	腐っても鯛		濡れぬ先の傘
	口は禍の門		猫に小判
	芸は身を助ける		喉もと過ぎれば熱さを忘れる
	怪我の功名		暖簾に腕押し
ことわざ 3	転ばぬ先の杖	ことわざ 7	花より団子
	紺屋の白袴		針の穴から天をのぞく
	鹿をおう者は山を見ず		人の噂も七十五日
	釈迦に説法		人のふり見てわがふり直せ
	過ぎたるはなお及ばざるが如し		火に油を注ぐ
	千里の道も一歩から		火のない所に煙は立たぬ
	損して得取る		百聞は一見にしかず
	大山鳴動して鼠一匹		豚に真珠
ことわざ 4	大は小を兼ねる	ことわざ 8	下手な鉄砲も数うてば当たる
	宝の持ち腐れ		蛇に見こまれた蛙
	蓼食う虫も好き好き		仏つくって魂入れず
	忠言耳に逆らう		待てば海路の日和あり
	提灯に釣鐘		ミイラ取りがミイラになる
	釣り落とした魚は大きい		三つ子の魂百まで
	鶴の一声		無理が通れば道理引っこむ
	灯台下暗し		門前の小僧習わぬ経を読む

	ことわざ	意味
ことわざ 1	虻蜂とらず	虻と蜂の両方を同時に取ろうとして、どちらにもにげられてしまう。欲ばりすぎると損をする。
	雨垂れ石をうがつ	同じの場所に落ちる雨だれは、長い間に下にある石に穴をあける。小さな力でも根気よく続ければ成功する。
	魚心あれば水心	魚に水と親しむ心があれば、水もそれに応じるものだ。相手の出方しだいで、こちらにも応じ方がある。
	嘘も方便	うそはいけないことだが、物事をうまく運ぶために必要な場合もある。うそもときには必要である。
	うどの大木	体ばかり大きくて、ものの役に立たない人のたとえ。
	鶉のまねをする鳥	鶉のまねをして魚をとろうとする鳥はおぼれてしまう。自分の能力を考えないで、人のまねをしても失敗してしまう。
	鬼の目にも涙	思いやりの心がない人も、ときには情け深い心を起こして涙を流すことがある。
	蛙の面に水	水の中に住む蛙は、顔に水をかけられても平気である。どんな仕打ちにあっても平気なこと。人からきつくいわれても、平然として聞こうともしないこと。
ことわざ 2	亀の甲より年の劫	「劫」は、長い時間のこと。年長者はだてに年をとってはいない。長年の経験は尊ぶべきものであるということ。現在では「年の功」と書くこともある。
	枯れ木も山のにぎわい	枯れ木も山におもむきを与えるのに役に立つ。つまらないものでも、ないよりはましである。
	雉も鳴かずばうたれまい	不必要なことをいわなければ、禍を招かずにすむことのたとえ。
	窮すれば通ず	行きづまってどうにもならないところまでくると、意外と解決の道が見つかるものである。
	腐っても鯛	元がよいものは、いたんだりおちぶれたりしても値打ちがある。おちぶれても、元の品格を思わせるものがある。
	口は禍の門	うっかりいった言葉で災いを招くことがある。言葉はつつしむべきであるということ。
	芸は身を助ける	特技があれば、それで身を立てることができ、困ったときには暮らしの助けにもなる。
	怪我の功名	やりそなになったことが、かえって手がらになる。なにげなくやったことが、偶然により結果を生む。

ことわざ3	転ばぬ先の杖	なにごとにも失敗しないように、用意をしておくことが大切である。濡れぬ先の傘。
	紺屋の白袴	紺屋が自分の袴は染めずにいつも白袴をはいていることから、他人のことに忙しくて自分のことには手が回らないこと。
	鹿をおう者は山を見ず	一つのことに熱中すると、他のことをかえりみる余裕がないこと。
	釈迦に説法	釈迦に対して仏法を説くように、そのことを知りつくしている人に教えることのおろかさ、不要さをいう。
	過ぎたるはなお及ばざるが如し	物事には限度があり、それを越えてしまうことは足りないのと同じようによくない。
	千里の道も一歩から	遠く長い道のりも、足元の第一歩から始まる。大きな計画も最初は手近なところから始まる。
	損して得取る	一時的には損をしても、それをもとにして将来の大きな利益を考える。
	大山鳴動して鼠一匹	前ぶれの騒ぎばかりが大きくて、結果はきわめて小さいこと。
ことわざ4	大は小を兼ねる	大きいものは、小さいものの代用品としても利用できる。
	宝の持ち腐れ	役に立つ物を持ちながら利用しないこと、また、才能や技術がありながら活用しないこと。
	蓼食う虫も好き好き	からいたデの葉を好んで食べる虫もいるように、人の好みはいろいろである。
	忠言耳に逆らう	相手のことを思っている忠告は、すなおに聞き入れられにくい。
	提灯に釣鐘	形は似ていても重さに大きな開きがあるところから、つり合わないことのたとえ。
	釣り落とした魚は大きい	つりそこなつた魚は大きく見える。手に入れかけて失ったものは、より惜しまれるものである。
	鶴の一声	他人の意見をおさえるような有力者・権力者の一言。
	灯台下暗し	灯台のすぐ下はかえって暗いところから、身近なことは意外とわかりにくいものであるということ。
ことわざ5	遠くの親類より近くの他人	遠くにいる親類より近くに住む他人の方がたよりになる。また、関係がうすい親類よりも親密な他人の方がかえって助けになる。
	隣の花は赤い	他人のものはなんでもよく見えることのたとえ。
	虎の威を借る狐	他の権力者に頼っていばる小人物のたとえ。
	泥棒をとらえて縄をなう	ふだんは準備をせず、事件が起きてからあわてて用意をすること。盗人をとらえて縄をなう。
	なくて七癖	多かれ少なかれ、どんな人にも癖があるということ。
	情けは人のためならず	人に情けをかけておけば、その人のためだけでなく、めぐりめぐって自分自身によい報いがくる。
	怠け者の節句働き	ふだんなまけている人は、他人が休むときに働く。
	習うより慣れろ	あらたまって習うより、自然に経験する方が効果がある。
ことわざ6	二階から目薬	二階から人の目に目薬をさすように、もどかしくて効果がないこと。
	憎まれっ子世にはばかる	他人に憎まれる人の方が、世の中では力があつたり幅をきかせている。
	二度あることは三度ある	同じようなことが二度あつたら、もう一度繰り返される。物事は繰り返されるものである。
	二兎を追う者は一兎をも得ず	同時に二つのことをしようとすると、両方とも成功しない。
	濡れぬ先の傘	失敗しないように前もって用心しておくこと。転ばぬ先の杖。
	猫に小判	どんなに貴重なものであっても、価値がわからない人にとっては何の役にも立たない。豚に真珠。
	喉もと過ぎれば熱さを忘れる	熱いものを飲みこんだとしても、のどを過ぎれば感じなくなってしまう。苦しかったことも、過ぎてしまえば簡単に忘れてしまう。
	暖簾に腕押し	力を入れてのれんをおしてもなんの手ごたえも効き目もないように、はりあいや手ごたえのないこと。
ことわざ7	花より団子	見て美しいものより、実際に役立つものを取ることを。
	針の穴から天をのぞく	針の小さな穴から天を見てもごく一部しか見えないように、自分の狭い考えで物事を判断しようとすること。
	人の噂も七十五日	噂はそのときだけのもので、しばらくすれば忘れられるものである。
	人のふり見てわがふり直せ	他人の行いを好ましくないと感じたら、自分は同じようなことをしていないか反省してみる。
	火に油を注ぐ	勢いのあるものにさらに勢いを加える。多くは悪いことについて使う。
	火のない所に煙は立たぬ	うわさが立つからには、なんらかの根拠があるはずだ。
	百聞は一見にしかず	人から何回も話を聞くより、直接見る方がわかりやすい。
	豚に真珠	どんなに貴重なものでも、価値のわからない人には無意味である。猫に小判。
ことわざ8	下手な鉄砲も数うてば当たる	たとえ下手でも、数多くやってみれば、まぐれで成功することもある。
	蛇に見こまれた蛙	蛙は蛇を前にすると怖くて動けなくなってしまう。反抗することもできずにくんでしまうことのたとえ。
	仏つくって魂入れず	ものをつくったりなにかをやったりしても、一番大事なものが抜けていること。
	待てば海路の日和あり	あせらず待っていれば、海が静かで航海に適した日がやってくるように、やがてよい機会が巡ってくる。
	ミイラ取りがミイラになる	人を探しに行ったまま帰ってこない。人を説得しに行つて逆に説得されてしまうこと。
	三つ子の魂百まで	幼い頃の性格は、年をとっても変わらない。
	無理が通れば道理引っこむ	筋道の通らないことが多く行われるようになると、正しいことが行われなくなる。
	門前の小僧習わぬ経を読む	ふだん見たり聞いたりしていると、いつのまにかそれを学び知ってしまう。